



想いをつなぐ

兼頭 玄

みなさんは途上国支援というどのような印象を持つだろうか。それは、先進国が行う施しではなく、信頼関係の構築だった。私は研修を通して、カギとなる姿勢は「互いを受け入れ、想いをつなぐ」ことだと考えた。

JICA の活動の中に海外協力隊がある。今回はバタンガス州で働くお二人を訪問した。農業を支援する三村さんも防災対策を行う川村さんも、現地の人々との熱意の差という壁にぶつかっていた。それでも、試食会で野菜に興味を持ってもらったり、現地のタガログ語でたくさん話しかけて距離を縮めたりと努力を欠かしていない。多くのフィリピン人にとって大切なのはやはり収入だろう。そのため環境問題への対策や防災は二の次になってしまう。しかしそんな状況を悲観するのではなく、ありのままを受け止めることが大切なのだと気づいた。今できることは、少しずつ信頼関係を築き、次の協力隊員が地域の人と協働しやすい環境を作ること。今は想いが十分に伝わっていないと感じても、数十年後、あるいは数世代先に希望の芽が顔を出す日を信じて。

自分は、国際協力では何か目に見える成果を上げなければならないんだという、目先の視点に囚われていた気がする。お互いにお互いの歩調に合わせ、少しずつ前に進んでいく「草の根」の活動。そこから一人の人間同士の歩み寄りによる国際協力の可能性に気付くことができた。「互いを受け入れ、想いをつなぐ」姿勢を忘れずに、この先歩んでいきたいと思った。